

## 新刊書： バイオセーフティの原理と実際

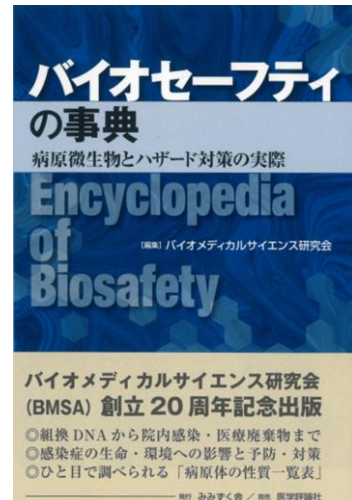
NPO 法人 バイオメディカルサイエンス研究会編集

<http://www.igakuhyoronsha.co.jp/1000/?ISBN=978-4-87212-091-3>



バイオセーフティの原理と実際  
定価 3,990 円(本体 3,800 円)  
B5 判/236 頁 上製本  
ISBN: 978-4-86399-091-3  
発行 みみずく舎/発売 医学評論社

バイオセーフティの事典  
定価 12,600 円(本体 12,000 円)  
B5 判/354 頁 上製本  
ISBN: 978-4-87211-903-9  
発行 みみずく舎/発売 医学評論社



書 評： 広島工業大学情報学部 越智 幸三 先生

本書「バイオセーフティの原理と実際」は、NPO 法人バイオメディカルサイエンス研究会(感染研の OB が主体となって運営)が既刊の「バイオセーフティの事典」の姉妹版として刊行したものである。いずれも「実務書」ながら、既刊本(事典)はやや硬質の内容で、全領域を網羅しながらも、どちらかというバイオセーフティに関わるプロ向けであった。これに対し、今回の新刊本は、教科書として大学・専門学校のテキストとして使えるほどに、噛み砕かれた説明と要点に絞った記述が特徴といえよう。“読み物”としても十分耐えうるほどに要領よく面白く記述されており、27 名の第一線の執筆者(堀田国元先生も一人)の技量がうかがい知れる。

冒頭で「バイオセーフティと微生物学の基礎」と銘打って細菌学・感染学を判り易く解説して、それに続く本論の理解を容易にしておき、「バイオハザードの実態」では最近のオウム真理教事件にも触れつつ、バイオセーフティが我々の想像以上に身近なものであることを再確認させてくれる。とりわけ「食品とバイオセーフティ」、「最小感染菌量、発症菌量」などの項目は農芸化学の食品分野に深く関係しており、また「人獣共通感染症」、「遺伝子組換えとカルタヘナ」、「動物実験におけるバイオセーフティ」などは農芸化学分野の者ならば必ず目を通しておくべき内容と言える。評者はこれまで、手洗いの大切さがいまひとつピンと来なかったが、最小感染菌量の概念を知るにつけ、この年齢になって遅まきながら論理的に理解することができた。専門家の話は聞いてみるものである。また大学の講義では、評者が担当している「食品衛生学」「微生物学」「バイオテク概論」に、補助教材として使わせて頂くこととした。なお、既刊本にはなかった「医薬品とバイオセーフティ」も新たに追加されており、製薬企業の人達にも大いに役立つに違いない。

もちろん、眼目である「実験室におけるバイオセーフティ」には最大のスペースが割かれており、実務書たるゆえんであるが、図表がふんだんに活用されているため、容易にイメージできるのがあるがありがたい。因みに本書は書価も手ごろであり、ラボといわず、個人でも所有して、仕事の合間にコーヒーでも飲みながら楽しめるといだろう。既刊本と併せ活用するのがベストかもしれないが、本書のみでも十分なバイオセーフティの知識を得ることができる。実験施設の管理者のみならず、一般の実験従事者や研究者に座右の書とすることを勧めたい。